

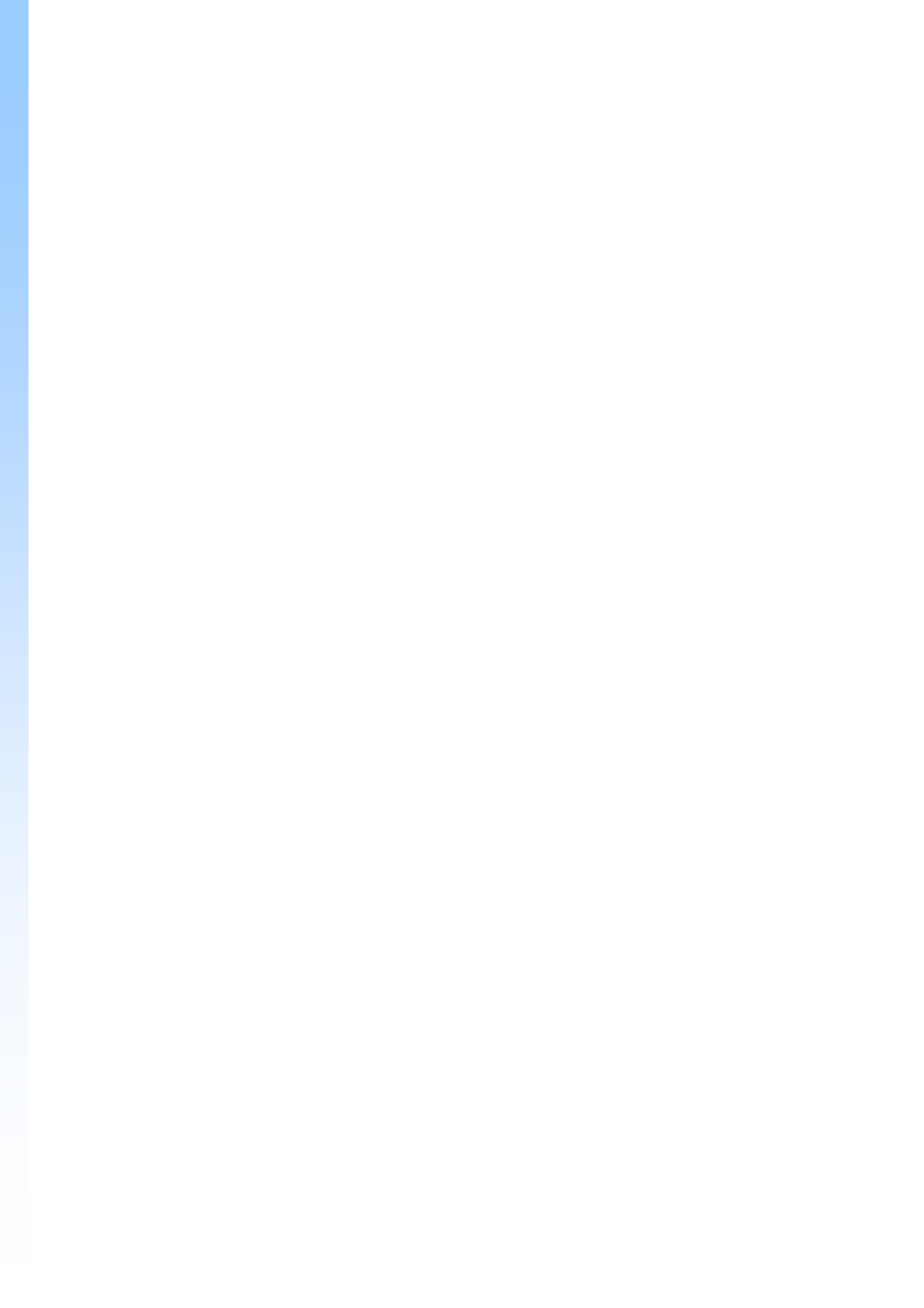


2008 (H20) 年度後半期社会文化及び人文社会科学研究科学学位記伝達式

目次

巻頭辞	2
2008年度後半期学位授与式	3
新規科目担当者	5
大学院新規特任教員	5
人文社会科学研究科新規事務補佐員	6

科学研究費 (新規) プロジェクト	6
所属教員による出版物	7
修了生による出版物	7
博士後期課程大学院生の研究業績	8
2008年度前半期全体研究会のお知らせ	8
2008年度紀要刊行予定	8



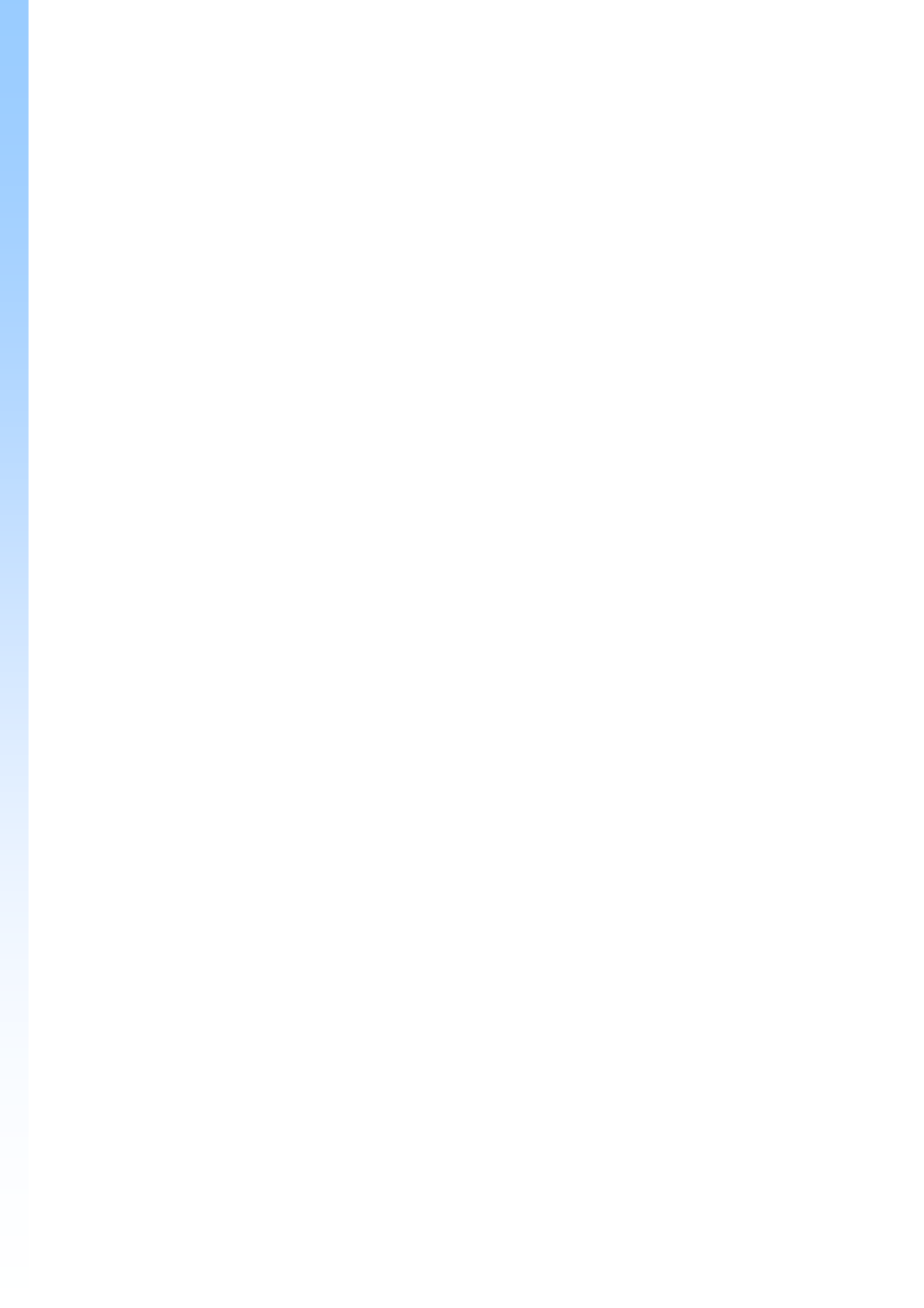
研究科長からの挨拶

人文社会科学研究科長 石田 憲

今日、大学院の役割は大きく変わろうとしている。これまで研究者を養成することが主たる任務と考えられてきた一方で、より広範な人々を対象とする高等教育の場が要請されるようになってきた。また、高度な職業人教育などが視野に入ってくるだけでなく、国際的交流の拡大も喫緊の課題となってきている。本研究科では、大学院GP、英語プログラムという一連の新しい試みを始め、こうした多様な社会的求めに応じるよう努力している。

しかし、大学院が単なる学部の延長でないことは明らかである。新たな試みの場合も、専門性を維持し、高度な研究水準の更なる発展を期している点では、これまでの人社研の歩みと本質的に異なるものではない。教員と院生の関係も、学問を通じた信頼に基づくものであることに変わりはない。とりわけ、学部も卒業した責任ある一個人として、研究の一端に触れようとしてきた院生は、その本務を遂げるべく精進して欲しいというのが、教員の切なる願いである。

人社研は、多岐の分野にわたる優秀な教員を擁していることもあり、院生は、専門についてより深い研究を進めていくと同時に、様々な学問領域に触れていく貴重な機会として授業を活用することができよう。昨今は早期の論文提出が求められるようになってはいるが、広がりのある知的関心こそ、大学院が最も喚起すべきものと考えられる。専門性と多様性を兼ね備え、自らの思考を高めていくことこそ、その後いかなる針路へ向かうとしても、貴重な財産となっていくはずである。



2008 (H20) 年度後半期学位授与式および学位記伝達式

2009年3月26日、千葉県文化会館において学位授与式が行われ、人文社会科学研究科として、初めて、博士後期課程修了生を送り出しました。

同日、人文社会科学系総合研究棟マルチメディア講義室において、学位記伝達式(右写真)が行われ、三宅明正研究科長から1人1人に修了証書が手渡されました。社会文化科学研究科修了により6名の方が、論文提出により2名の方が、人文社会科学研究科後期課程修了により5名の方が学位(博士)を取得されました。人文社会科学研究科博士前期課程修了により51名の方が学位(修士)を取得されました。



2008年度後半期社会文化科学研究科修了者(2009年3月)

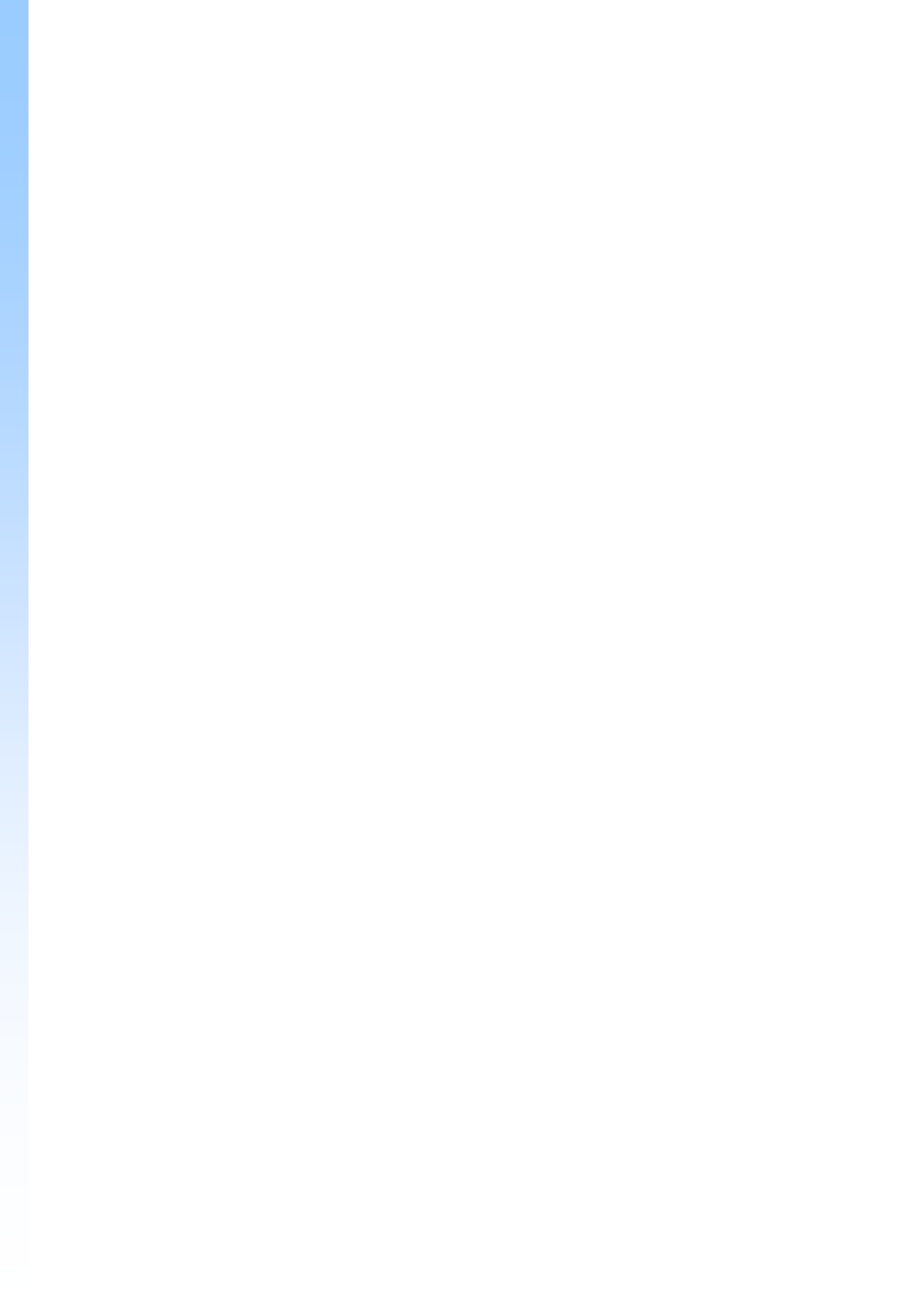
氏名	博士論文題名	取得学位
韓 葵花	日中韓自動車部門の企業間関係の比較	博士(経済学)
楊 明	中国語の結果構文における動補構造の研究	博士(文学)
黒田加奈子	パドヴァ・コムーネのパラッツォ・デッラ・ラジョーネの壁面装飾研究 — 中世末期イタリア都市国家の公共建築空間の装飾に見る国家像 —	博士(文学)
渡部 薫	都市の自己革新と文化—一つの都市再生論として—	博士(学術)
岩佐光広	生の型、死の構え ラオス低地農村部における終末期の民族誌からのバイオシックス再考	博士(学術)
田端克至	国際通貨制度と資本取引の役割	博士(経済学)

2008年度後半期社会文化科学研究科論文提出による学位取得者(2009年3月)

氏名	博士論文題名	取得学位
長崎 郁	コリマ・ユカギール語の記述研究—形態論を中心に—	博士(文学)
上村雄彦	持続可能な福祉社会に向けたグローバル・ガバナンス—グローバル・タックスの可能性を中心に—	博士(学術)

2008年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者(2009年3月)

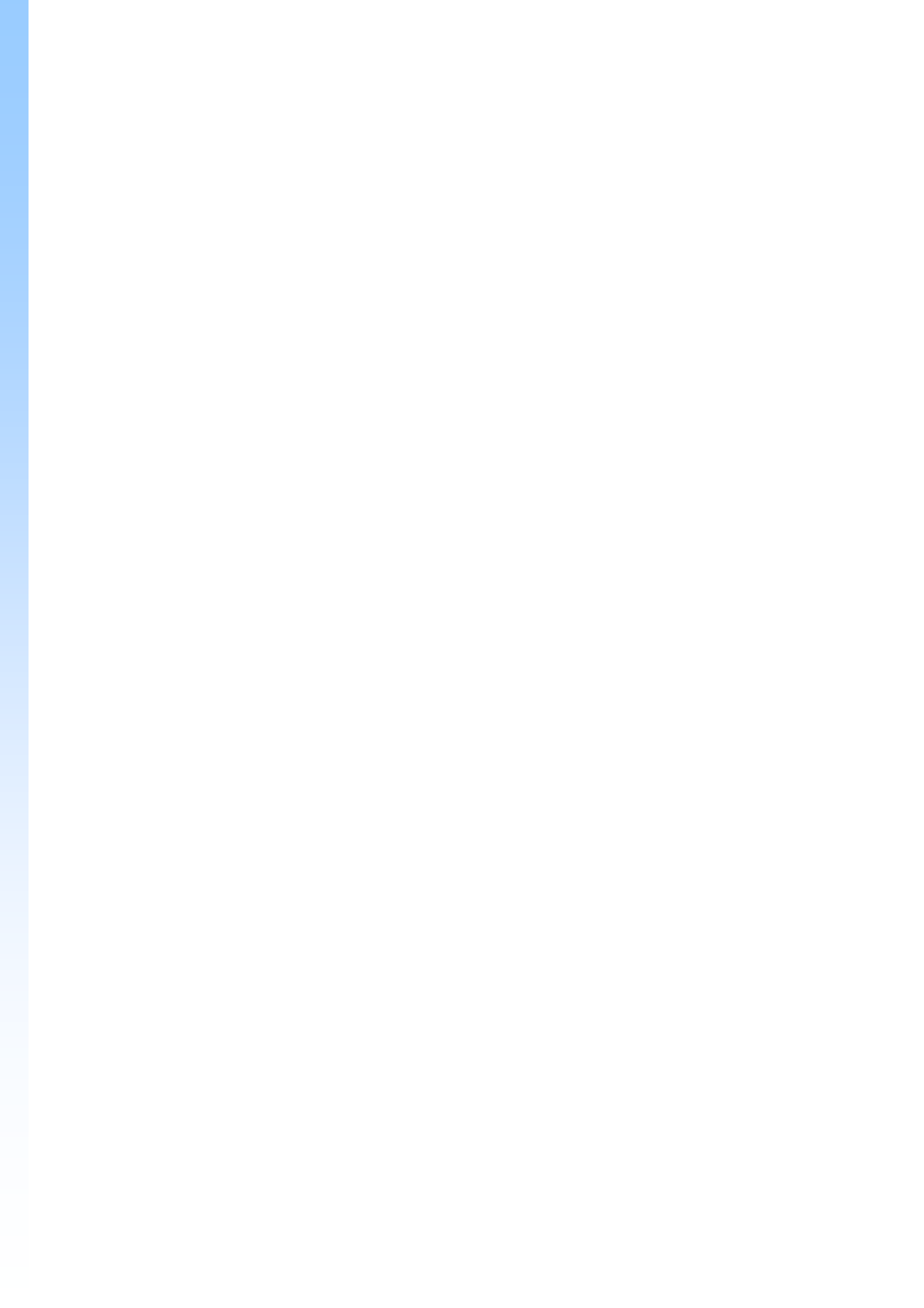
氏名	博士論文題名	取得学位
犬塚康博	20世紀日本の博物館に関する研究	博士(文学)
王 維婷	現代中国における新中間層の形成とその性質—中間管理者層と労働者層との比較に注目して—	博士(経済学)
藤井保紀	暖簾の会計処理が示す企業会計の方向性	博士(経営学)
牧野 悠	柴田練三郎・剣豪小説論—眠狂四郎を中心に—	博士(文学)
廖 郁雯	日本語名詞の格形式と中国語介詞構造との対照的研究—デ格を中心として—	博士(文学)





人文社会科学科博士前期課程学位（修士）取得者（2009年3月）

許 亘	崔 東花	鈴木 一史	高木 晋一郎
ケンティミン	富田 安子	ナレンドルマル	長谷川 佳澄
村山 健太	李 國民	相沢 祐毅	浮谷 千尋
藤原 健太郎	松下 亜由子	尹 相国	平 進之介
鳥居 裕史	深沢 雄介	岩根 広成	加藤 壮一郎
呉 裕川	ドーホアンタイ	宮島 英司	山口 麻果
武蔵 義弘	伊藤 佳世子	栗原 久定	河内山 朝子
吉野 聡子	川口 知加	木村 真梨子	薛 華
ガリシアアトレミ	宮本 洋平	飯田 奈津子	加納 圭介
河合 文	金 成哲	今野 圭	嶋村 藍
正田 仁宏	田川 史朗	藤代 幸那	山下 真衣
吉沢 文武	児玉 良太	黄 治	關根 利恵
文 傑	宮田 秀美	李 宏	



2009 (H21)年度前半期新規科目担当者

2009年度前半期の人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	地域文化形成	記録情報	准教授	大原祐治	日本近代文学資料論、日本近代文学資料論演習
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤	准教授	児玉香菜子	ユーラシア社会文化論、ユーラシア社会文化論演習
博士前期課程	総合文化研究	比較文化	教授	ステファンヴント	日独比較文化論、日独比較文化論演習
博士後期課程	公共研究	公共哲学	准教授	内山直樹	比較価値論
博士後期課程	公共研究	公共哲学	准教授	山本芳久	比較宗教哲学
博士後期課程	社会科学研究	経済学・経営学	准教授	各務和彦	ベイズ統計学
博士後期課程	社会科学研究	経済学・経営学	教授	佐藤栄作	マーケティング・サイエンス特論
博士後期課程	文化科学研究	文化情報	准教授	岡部嘉幸	日本語構造分析論
博士後期課程	文化科学研究	文化情報	教授	竹内比呂也	文化情報制度論

2009 (H21)年度大学院新規特任教員

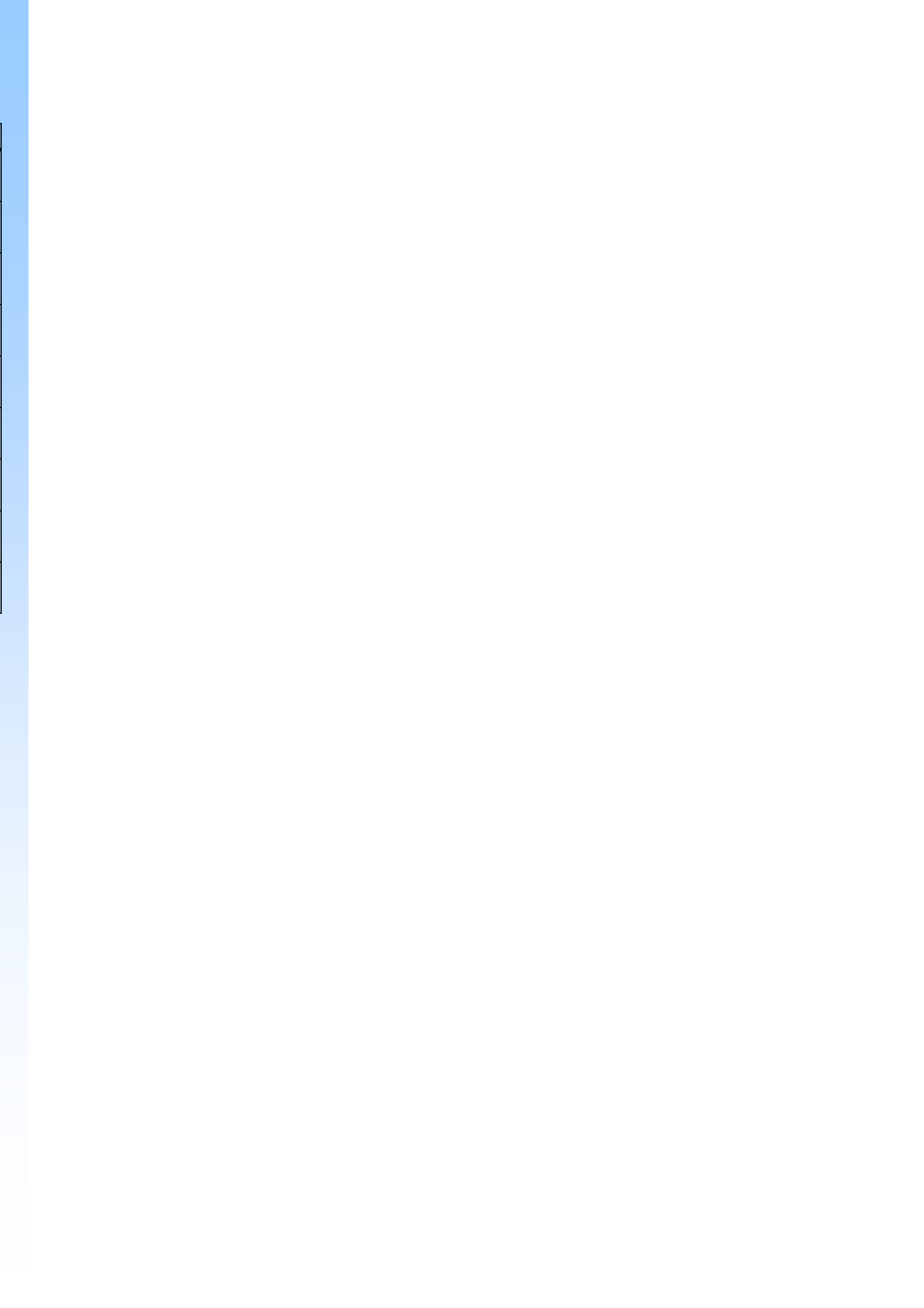
2009年4月1日付で大学院教育支援室に特任教員1名と大学院地球福祉研究センターに特任教員1名が着任しました。以下、それぞれ、1) 最終学歴 2) 研究テーマ 3) 主要業績(3点以内) 4) コメントとなっています。

吉永明弘 (よしなが・あきひろ)特任教員

- 2006年 千葉大学大学院社会文化科学研究科修了 博士(学術)
- 環境倫理学、公共哲学
- ・「『環境倫理学』から『環境保全の公共哲学』へーアンドリュー・ライトの諸論を導きの糸に」、『公共研究』第5巻第2号、2008年9月、118頁-160頁(第2回社会倫理研究奨励賞受賞)。
・「人間主義地理学は環境論にいかにかに寄与しうるか」『公共研究』第4巻第1号、2007年6月、9頁-36頁。
・「環境保全の公共哲学」、博士論文、千葉大学大学院社会文化科学研究科、2006年。
- 新しい環境で、多くの刺激を受けたいと考えております。

一ノ瀬佳也 (いちのせ・よしや)特任教員

- 2004年 千葉大学大学院人文社会科学研究科修了 博士(法学)
- これまでの政治思想史は、17世紀の社会契約論を中心として論じられてきた。そのため、原子論的な個人主義を前提としてながら、「自然状態」のカオスから国家を人為的に構築することが考えられてきた。これに対して、18世紀のスコットランド啓蒙哲学の理論においては、諸個人が係する「社会性」(sociality)に基づいて新たな理論が提起されていたのである。彼らの理論においては、様々なルールの存在を前提として自生的に社会が形成されてくる。国家による一元的な統合性よりも「社会的多元性」(social diversity)が重視された。このような自生的な社会形成において、「公」と「私」の観念の境界は柔軟性をもつことになる。これらについての理論的な検討を行なっている。
- ・「アダム・スミスと道徳哲学と政治論——フランシス・ハチスンを媒介として」、『公共研究』第2巻第2号、2005年9月、177頁-237頁。
・「アダム・スミスにおける『政治』と『経済』——『道徳一政治経済』の理論」、博士論文、千葉大学大学院社会文化科学研究科、2004年。
・「ジェイムズ・ステュアートの『政治経済』の理論 —『市場と国家』のありかたについて—」、千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書第73集『市場と国家、そして市民社会』、2004年2月、1頁-25頁。
- 地域に開かれた大学づくりを目指し、学問や大学の新たな可能性について追及していく所存であります。



人文社会科学研究所 新規事務補佐員

2009年5月1日付で新規に事務補佐員が人文社会科学研究所に配置されました、

才木麻里奈 (さいき・まりな)事務補佐員

2009 (H21)年度 科学研究費新規プロジェクト

2009年度の新規採択は以下の通りです。

- 1) 代表者名
- 2) 2009年度予算額 (単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。)

専任教員

基盤研究(C)一般

「情報通信技術の進展と保護客体としての情報財のあり方」

- 1) 石井徹哉教授
- 2) 1,560,000 (360,000)

基盤研究(C)一般

「近世アイルランド・ジャコバイトによる環大西洋事業網の形成と展開」

- 1) 大峰真理准教授
- 2) 1,170,000 (270,000)

基盤研究(C)一般

「古代・中世における〈武〉の文学表現と歴史・伝承との連関についての総合探究」

- 1) 久保 勇助教
- 2) 910,000 (210,000)

兼任教員

基盤研究(B)一般 在日フィリピン人の労働・女性化・市民権—パブリック人類学と市民社会の可能性 (鈴木伸枝文学部教授)

基盤研究(C)一般 アンтониオ・フェデリーギの彫刻—15世紀シエナにおけるドナテッロ芸術の受容— (上村清雄文学部准教授)

基盤研究(C)一般 読経道の復元的研究—中世における宗教・芸能・文学の関係を視座として— (柴 佳世乃文学部准教授)

基盤研究(C)一般 ルネサンス期イングランドにおける文学と出版の研究 (篠崎 実文学部准教授)

基盤研究(C)一般 新自由主義への抵抗運動の文化的位相：グローバル・ジャスティス運動と予示的政治 (澁谷 望文学部准教授)

基盤研究(C)一般 能動的観察が視覚情報処理の時間的特性に及ぼす効果についての心理物理学的検討

(一川 誠文学部准教授)

若手研究(B) 20世紀ロシア文学と文化史の相関性に関する新パラダイム (鴻野わか菜文学部准教授)

若手研究(B) 日本語学習者の終助詞の使用に関する総合研究—「よ」「ね」「よね」の使用を中心に (高 民定文学部准教授)

基盤研究(B)一般 外郭団体も含めた効率的な自治体経営のための地方公会計改革と決算数値活用方法の研究 (大塚成男法経学部教授)

基盤研究(C)一般 地方自治体における自然エネルギー導入の現況と可能性の定量的把握研究 (倉阪秀史法経学部教授)

基盤研究(C)一般 アルトジウスの政治思想と16世紀における政治概念の変容についての考察 (関谷 昇法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 時系列アプローチによる経済格差の計測 (西埜晴久法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 戦前日本における小農と工場労働者の就業態度：織物業の女性労働者の事例を中心に (荻山正浩法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 均衡問題の理論的究明とスペース配分最適化問題への応用 (青山耕治法経学部准教授)

若手研究(B) 干渉の国際法規制における「客観法」と「主観法」の二元的規律構造 (藤澤 巖法経学部准教授)

若手研究(B) 法廷における主張立証(アドヴォカシー)の技術と証拠法—その理論的考察 (笹倉宏紀法経学部准教授)

基盤研究(C)一般 ヨーロッパにおける民法改正作業とその日本民法への影響 (半田吉信法経学部教授)

修了生及び博士後期課程大学院生の受賞 人文社会科学研究所・社会文化科学研究科

吉永明弘

第2回社会倫理研究奨励賞、2009年2月

(本研究科教育支援室特任教員、2006年9月
社会文化科学研究科修了、博士(学術))



吉良智子

第2回「未来を育てる子育てプロジェクト」

女性研究者の支援、2009年2月

(本研究科博士後期課程大学院生)

寺性

する

導入
)

十測

人文社会科学研究所所属教員 (兼担教員を含む)による出版物

柳澤清一著

『北方考古学の新天地—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—』、六一書房、2008年8月



先史考古学の方法論を基礎として、10年余りにわたって積み重ねた北方考古学に関する論文12篇と、2007年月7月から2008年1月までに書き下ろした5本の論文を一書にまとめる。土器個体を地点、層位、遺跡、地域を単位として型式学的に細かく分析し、Ma-b・B-Tm 火山灰を「鍵」層

として用いながら、本州島北部から北東アジアを視野に入れる環オホーツク海域において、通説を逆転させた新しい編年体系を提案。終章では、この編年案をもとにして、北方史上に著名な阿倍比羅夫の北征に係わる「肅慎」とは、考古学上の「十和田式文化」を担う人々に他ならない、という仮説を導いた。

<目次>

- 第1章 北方編年体系の疑問点を探る
- 第2章 道東・道北を対比した広域編年の試案
- 第3章 道東における遺跡編年案の見直し
- 第4章 トビニタイ・カリカリウス土器群と擦紋末期土器の編年
- 第5章 道東における貼付紋系土器編年の検討
- 終章 環オホーツク海域編年への展望

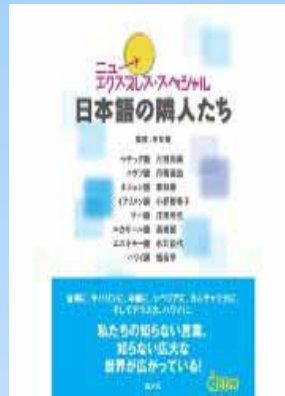
佐藤博信・松本一夫・荒川善夫共編書

『中世下野の権力と社会』、岩田書院
2009年5月。

この五月に佐藤博信・松本一夫・荒川善夫の三名の共編書で『中世下野の権力と社会』(岩田書院)を出版することが出来た。A5判で456頁・上製本・カバー装である。本書は、下野、現在の栃木県の中世の歴史を歴史考古から政治・宗教・文化の諸側面から検討した論文集である。執筆者十四人は全員戦後生まれで大学の教員・高校の教員・小学校の教員・市役所の職員・文書館員・博物館員・大学院生・僧侶・自営業など多種に及ぶ。そのなかには本学本研究科博士後期課程の石橋一展君と本学文学部史学科の卒業生久保賢司君が含まれている。栃木県でこうした中世史に関する論文集が編集されたことは初めてであり、今後の研究の指針となりうると確信している。

中川裕監修・月田尚美他著

『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たち』、白水社、2009年6月



日本語を取り巻く地域で話されるいろいろな言語を取り上げ、語学入門書の形式で、その発音や文法のエッセンスを紹介しようという試みの書。収録した言語は日本に地理的に近い順から、セデック語(台湾)、ニヴフ語(サハリン)、ホジェン語(黒竜江沿岸)、イテリメン語(カムチャッカ半島)、サハ語(サハ共和国)、ユカギール語(コリマ川沿岸)、

エスキモー語(チュコト半島・セントローレンス島)、ハワイ語(ハワイ諸島)の8つ。サハ語を除いてはいわゆる「消滅の危機に瀕した言語」であり、一般の語学書で取り上げられる可能性はまず無いといってよいものばかりである。白水社という語学書の大手がよく出したものだと思う。

本書の特徴は何といっても、これらの言語を現地直接記録してきたフィールドワーカーたちの記述言語学的成果に基づくものであり、それぞれの言語の音声をCDですべて聞くことができるというところにある。専門の言語学者でも、このような少数言語の音声を一度に聞く機会はめったに無いといってよい。また、これらの言語は系統論的にも類型論的にも非常にバラエティに富んでおり、日本語というものがこうしたさまざまな言語に囲まれた地理的環境で成立してきたのだということを知ることは、日本の歴史・文化・言語に興味を持つ人々にとって、非常に重要なことであろう。それがこのような本を企画した目的である。

ちなみに、本書の著者8名のうち4名—ニヴフ語・丹菊逸治、ホジェン語・李林静、イテリメン語・小野智香子、ユカギール語・長崎郁の各氏—は、千葉大社文研の修了生である。社文研のユニークさを世間に知らしめる好材料として、大いに喧伝したいと思う。なお、私の専門のアイヌ語は日本語の一番近くで話されてきた言語だが、すでにエクスプレスシリーズでも刊行されている「メジャーな」言語なので、本書では取り上げていない。

修了生による出版物

人文社会科学研究所・社会文化科学研究科

ザヨンツ・マウゴジャータ (Malgorzata Zajac)

『千島アイヌの軌跡』、草風館、2009年4月

本書はかつて千島列島に居住し、日露両国の政治の狭間に置かれていた千島アイヌの運命をたどるものである。時期的には一八世紀初年に千島アイヌがロシア人と接触してから一九四五（昭和二〇）年に北海道へ再移住させられるまでの期間、特に、一八七五（明治八）年以降の時期に重点を置いて扱う。

千島アイヌの運命の問題を取り上げるために日露英波語資料、文献と新聞記事を使い、聞き取り調査を行った。それによって彼らの歴史におけるいくつかの空白部分を埋めることができた。結論として、彼らの歴史にはロシアと日本の両国の都合で実施された同化政策が重なり合っており、彼らは日露両国の政治の犠牲者となったと言っても過言ではない。現在、千島アイヌの血を引く人があちこちに暮らしていたとしても、固有の言語、文化を持つ民族としては消滅しているということは否定できない事実である。

2009年1～6月

博士後期課程大学院生の研究業績

著書・論文

山崎良雄・高橋典嗣（監修）『地球のしくみ大達人』集英社、2009年1月



高橋典嗣・坪田幸政・山崎良雄（編著）『新版・環境教育実践集』、アプリコット、2009年5月



高橋典嗣・吉川真・多田隆治・中村昭子・古宇田 亮一
「小惑星によるハザード・小惑星から地球を護る」

『ASTEROID』Vol.18(1)、2009年1月。

高橋典嗣「宇宙科学・地球科学分野における科学 体験活動の意義と実践」、『人文社会科学研究所』第18号、2009年3月。

山崎良雄・高橋典嗣・安藤康行「地球探検隊の試み ～富士山～」、『千葉大学教育学部研究紀要』第57号、2009年3月。

メディア・報道

<新聞>

高橋典嗣「宇宙の人工物は大半はごみ」、『読売新聞』2009年2月13日夕刊

高橋典嗣「小惑星また衝突」、『東京新聞』2009年5月12日朝刊

2009 (H21) 年度前半期 全体研究会のお知らせ

2009年9月29日（火）と30日（水）の2日間にわたって開催されます。プログラム等詳細は後日、人社研ホームページをご覧ください。

人社研ホームページ

<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/>

2009 (H21) 年度紀要 『人文社会科学研究所』刊行予定

『人文社会科学研究所』第19号の刊行は9月末を予定しています。

『人文社会科学研究所』第20号について

『人文社会科学研究所』第20号の募集は12月上旬を予定しています。「刊行予定」、「投稿規定」、「スタイルガイド」等は人社研ホームページ (<http://www.shd.chiba-u.ac.jp/~ghss/activity/students.html>) をご覧ください。

発行者 千葉大学大学院人文社会科学研究所

発行日 2009年9月11日

Phone/fax 043-290-3574

ghss412@shd.chiba-u.ac.jp

